昭和59年度

岩船横穴墓群・中曽司遺跡
坪　井　遺　跡・下明寺遺跡

発掘調査概報

1 9 8 5

橿 原 市 教 育 委 員 会

例　　言

1.　本書は、奈良県橿原市教育委員会が昭和59年度国庫補助事業として実施した岩船横穴墓群、中曽司遺跡、坪井遺跡、下明寺遺跡発掘調査概報である。

2.　調査は、橿原市教育委員会事務局社会教育課が行った。うち、佐藤幸一、前田聖治が事務を、斉藤明彦が現地調査を担当した。

3.　調査に際しては、次の方々に所有地を提供していただいた。記して感謝したい。

○橿原市大久保町477番地の2　　森田義雄氏
○大阪市鶴見区横堤1－11－106　　井上盛雄氏
○北葛城郡広陵町大字古寺325番地　　乾　新八郎氏
○橿原市葛本町442－1　　森本嘉孝氏

また、調査補助ならびに整理概報作製にあたっては
石橋尚樹(大阪工業大学)、田仲伸王(関西大学)、木村澄子、
阿部郁子、岡橋朱實、砂田カヨ子の諸氏に協力して頂いた。

4.　調査において奈良県立橿原考古学研究所々員の方々をはじめ下記の方々より御教示、御協力を賜った。記して感謝したい。

・奈良県立橿原考古学研究所　石野博信氏、泉森 皎氏
・奈良国立飛鳥資料館学芸室長　猪熊 兼勝氏

5.　本概報の編集、執筆は斉藤明彦がおこなった。

目　　次

Ⅰ　岩船横穴墓群
はじめに／位置と環境……1
位置と環境／1号墓調査概要……2
遺物出土状態……3
2号墓調査概要……4
遺物出土状態／小結……5
Ⅱ　中曽司遺跡
はじめに／位置と環境……7
調査の概要……8
Ⅲ　坪井遺跡（5次）
はじめに／位置と環境……9
調査概要……10
小　結……11
Ⅳ　下明寺遺跡
はじめに／位置と環境……12
調査概要……13
小　結……14

Ⅰ．岩船横穴墓群

はじめに

今回の調査は、昭和58年５月に白橿南小学校の生徒により山中にて遊んでいた際、偶然にも発見され、翌日橿原市教育委員会に連絡があり立会い調査をしたところ南側に開口した２基の横穴墓を確認した。現場は、当面開発行為等により破壊される恐れがないため遺構保存・危険防止を兼ね応急処置として土嚢で開口部を塞ぐことにした。調査は昭和59年６月18日～８月11日まで石室の規模・構造を確認することを目的として調査を実施した。その結果、石室の規模・構造が異なる横穴墓で

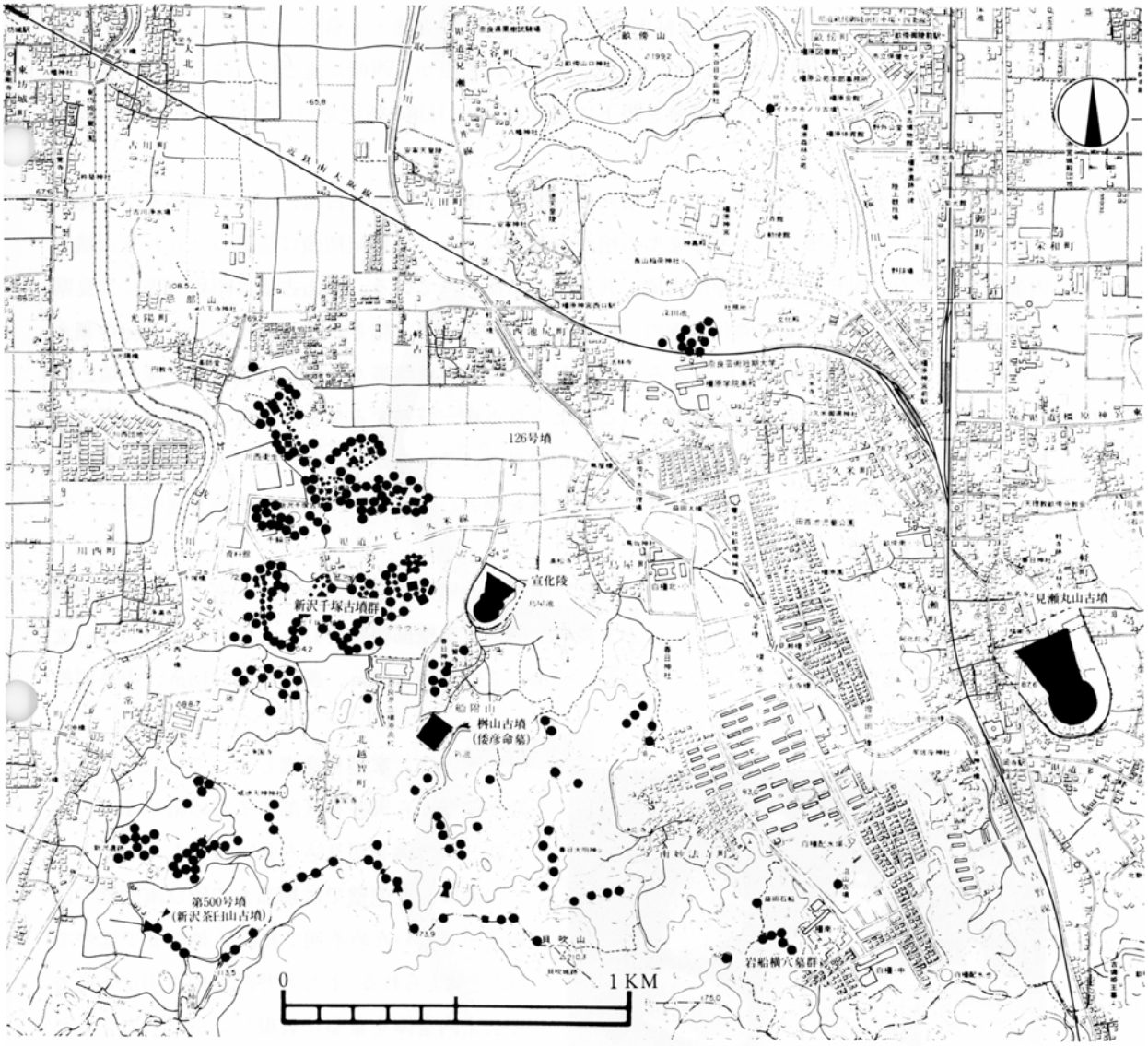


図１　岩船横穴墓群調査位置図（１/10000）

あることがわかり、また周辺踏査により尾根沿いに新たに3基の横穴墓が発見され計5基を数える。

以下調査地域周辺における古墳分布をみることとする。

位置と環境（図1）

橿原市域に立地する古墳のほとんどは越智岡丘陵から北に広がる貝吹山の周辺に集中している。なかでも貝吹山から北に延びる丘陵上に立地する新沢千塚古墳群は、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳など尾根上に密集して点在し、そのほとんどが木棺直葬を中心とした後期古墳が大部分を示めている。そんななかで213号墳は粘土槨をもつ前期古墳、大陸・半島系の色彩が強い遺物が出土した126号墳のような中期古墳も立地している。さらに貝吹山から西側に延びる丘陵上には曽我川の河岸段丘面に立地する弥生時代の遺跡を眼下に見おろす500号墳（新沢茶臼山古墳）を中心とする古墳群も点在する。

貝吹山より北東に延びる丘陵上には、横穴式石室を主体とする小谷古墳、沼山古墳などが立地し小谷古墳は切石造りの横穴式石室に家型石棺が内蔵されており7世紀初頭に位置づけられる古墳で内部構造などから明日香村の岩屋山古墳と共通性が指摘されている。沼山古墳は昭和57年に奈良県立橿原考古学研究所が公園整備化計画の一環として発掘調査が実施され出土遺物より6世紀中葉から後半にかける時期に築造されたとみられ、石室の石組み状態等から乾城古墳、鑵子塚古墳と同一タイプとされている。[①] 岩船横穴墓群は、このような古墳が分布するなかに位置し尾根上（標高約132m）南傾面に立地する。横穴墓は当初2基しか発見されていなかったが、その後の分布調査によって全部で5基確認された。今回はそのうち2基を調査した。以下、調査の概要を述べる。

1号墓調査概要（図2）

石室は、花崗岩の岩盤をくりぬいてつくられた両袖式の横穴式石室である。石室の規模は、南側壁・北側壁で現存長約5.78m、4.46m、玄室長約2.68m、奥壁部幅約1.41m、中央部約1.72m、玄門部約1.65m、奥壁部高さ約1.53m、中央部約1.65m、玄門部約1.68m、羨道長約3.18m、中央幅約1.25m、高さ約1.55～1.65mを計る。

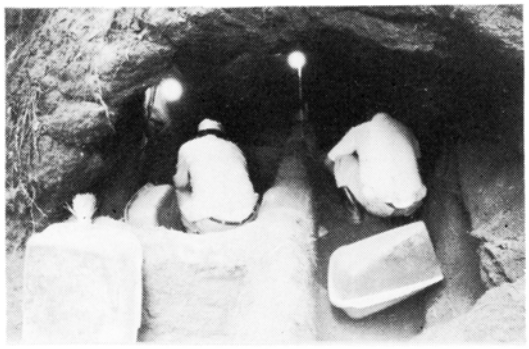


写真1　1号墓作業風景

玄室内は、家型を意識してつくられているためか側壁から天井を区部するため幅約3cm、深さ約2cmの溝を切り込み強い稜をもたしている。この溝は、北側壁では袖部まで延び南側壁では剝落が著しいため不明であるが、袖部まで延びていたと考えられる。また天井部も屋根形であるなど玄室内全体を家型に表現していたと考えられる。床面は、全体に平担に仕上げられているが、両側壁、天井、奥壁にくらべると荒い仕上げで

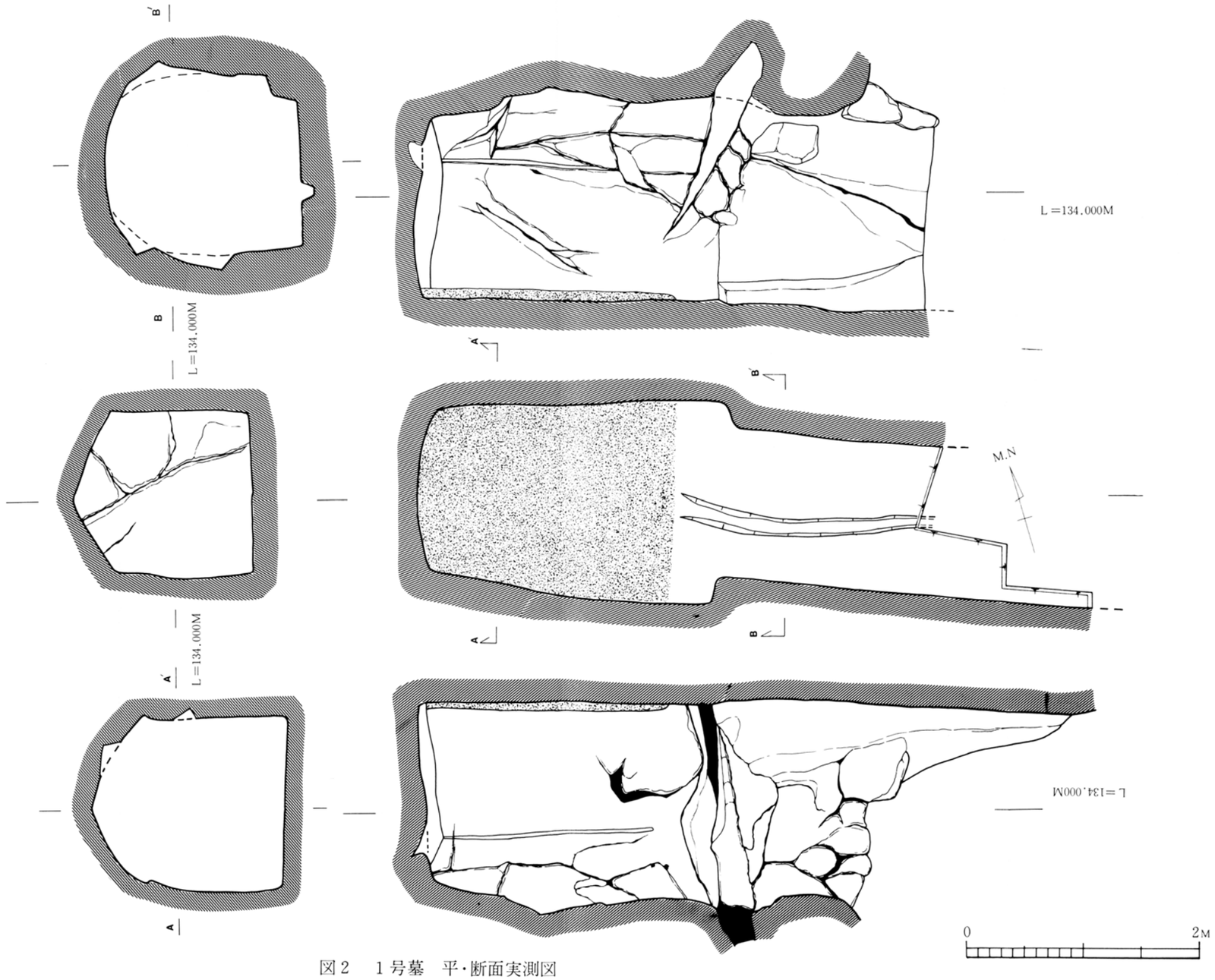


図2　1号墓　平・断面実測図

ある。玄室内の床面（岩盤面）は、羨道部より雑に仕上げられその上に厚さ約８～10cmの粘土が敷きつめられ玄室内の¾を示めている。(図2.メッシュ部分）この粘土を断面観察したところ岩盤面上に厚さ約５cmの暗黄褐色粘土を敷きつめ、その上に厚さ約３～５cmの黄褐色砂質土が敷かれ西側と東側では約２cmの差がみられるがほとんど平担面である。袖は、羨道部からみて左側、つまり南側の袖のほぼ南に向って直角につくられており袖幅約11cmを計る。それに対し右側の袖は、玄室よりに向ってつくられ袖幅約10cmを計る。排水溝は、玄室門から羨道部に向って約２m続く岩盤をくりぬいた幅約17cm、深さ約10cm断面がU字形をした素掘溝でゆるやかなカーブを抽いているがほぼ一直線上に延び石室の主軸方向(N-57°-E)と一致する。東西の高低差は約12cmでゆるやかな傾斜である。

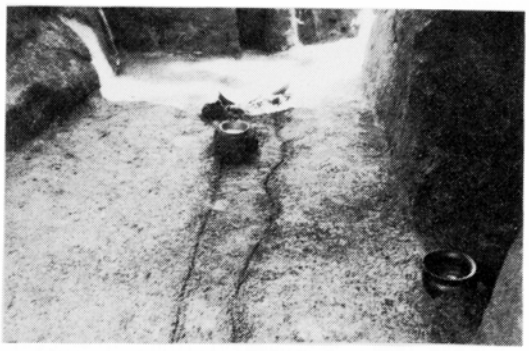


写真２　遺物・排水溝検出状態

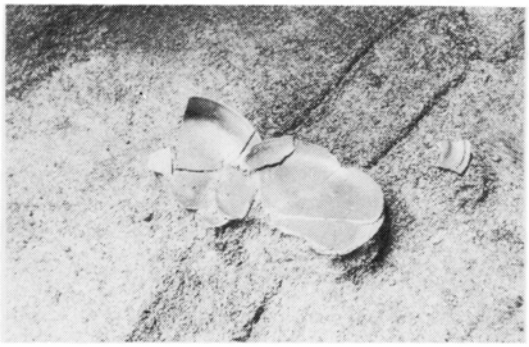


写真３　遺物出土状態（南から）

の遺物は、原位置にあるとは考えられず古い段階に動いた可能性が考えられそれも石室内に土があまり堆積していなかった時期とみられる。

以下、土器説明を若干付け加えておきたい。

須恵器(杯)図4-1.器高3.2cm、口径9.9cmを計る完型品で口縁部内外面は横方向のナデが施され外面底部はヘラケズリがされている。胎土は

遺物出土状態（写真２・３・４）

遺物は、上層より中世の土器をともなう径約50cm、深さ約20cmの焼土壙を玄室南側壁よりで検出した。土壙埋土上層より焼土・炭化物が出土し、下層から羽釜片、瓦器片、土師皿片が数点出土している。また、土壙周辺から釘状鉄製品、砥石、遺存状態の良い骨の断片が約10点ほど出土している。骨はこれ以外にも下位レベルからも数点出土している。

さらにこの土壙と同時期ぐらいに掘られたと思われる盗掘抗を玄室北側壁部分で検出したがまったく遺物は出土しなかった。

つぎに羨道部床面中央（排水溝部分）直上より須恵器の杯身・杯蓋(断片)、土師器の皿、杯身が重なった状態で出土し、南側袖部より土師器の小型壺が完型の状態で出土している。これら

写真４　遺物出土状態（東から）

写真5　遺物出土状態（南から）

1～2mmの砂粒を含んでおり燃成は良好である。

土師器(壺)図4-2 器高7.9cm、口径11cmを計る完型品である。外面は口縁部から体部まで縦方向のハケで調整され口縁部は指ナデで消している。体部下半部から底部まで横方向の荒いハケ調整がされている。内面は、口縁部に横方向のハケ調整が施されその上から指ナデがされている。　土師器(杯)図4-4.器高5.7cm、口径17cmを計る。口縁部から底部まで外面を横方向のヘラミガキを施し底部外面をヘラケズリして平らにしている。内面には2段の斜放射の暗文を施す。色調は赤褐色で胎土も緻密である。

写真6　2号墓調査前

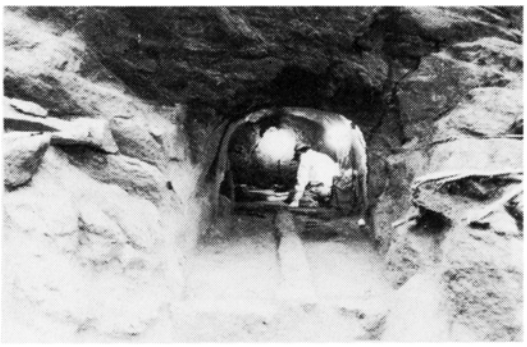


写真7　2号墓調査風景

2号墓調査概要

石室は、花崗岩の岩盤をくりぬき全体を丁寧に仕上げられた両袖式の横穴式石室である。

1号墓より遺存状態は良好で石室の主軸方向はN-59°-Eである。規模は、全長約5.73m、玄室長約2.77m、奥壁部幅約1.70m、中央部約1.66m、玄門部約1.58m、奥壁部高さ約1.20m、中央部約1.36m、玄門部約1.23m、羨道長約2.87m、中央幅約1.03m、高さ約1.06～1.10mを計りドーム状に造り出している。

石室全体の壁面は、なめらかに仕上げられているがとくに奥壁では中央右側の壁全体に幅約5cm、長さ約10cmの単位をもつ工具で右下がりに壁面を削った痕跡がよく残る。

床面は、全体に平担であるが両側壁・天井・奥壁などにくらべ荒く仕上げられている。玄室内の床面は、1号墓と同様粘土が敷きつめられ、この粘土は1号墓で検出したものとは土質が若干異なる。断面観察より岩盤面直上に厚さ約3cmの暗茶褐色砂質土、その上に厚さ約5～7cmの淡黄褐色粘土が玄室内の約⅔に敷きつめられ東西のレベル差は約5cmを計る。

排水溝は、1号墓のように顕著な排水施設はなく羨道部床面中央部を全体に低くくし断面V字形に造り出している。このことは集水的な性格をもたしレベル差によって外部へ排水されると思われ

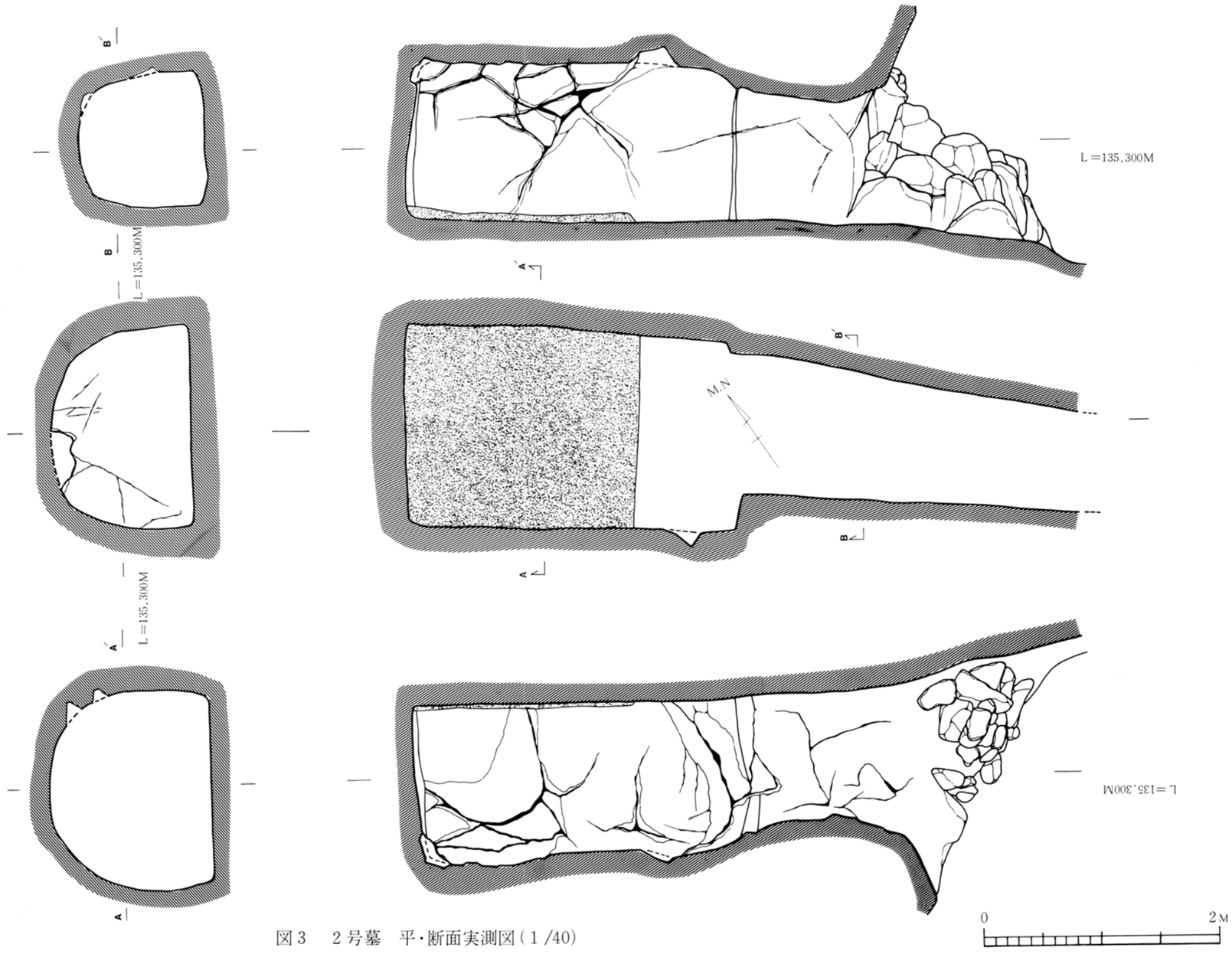


図3　2号墓　平・断面実測図（1/40）

る。ちなみに玄室内粘土床面と羨門床面のレベル差は約10cmを計りゆるやかな傾斜をもたしている。

写真8　2号墓西側袖部分

遺物出土状態（写真9）

遺物は、1号墓にくらべ極端に少なく石室埋土内上層より羽釜や土師器皿の破片が数点出土しただけであった。玄室内下層より炭化物と焼土を含む土拡が確認され径約60cm・深さ約30cmほどを計る。この土擴は盗掘抗と思われるが、埋土内より動物の牙、炭化した植物などが出土しており、また細片であるが土師器も出土している。これら一連の遺物は、媒が付着し全体に黒味を帯びている。

写真9　遺物出土状態（南から）

また羨道部埋土下層からは、羽釜片が2点出土している。これらはすべて攪乱土内より出土したもので中世においてかなりひどく全体を盗掘によって攪乱されたものと思われる。羨道部入口床面直上より床面にへばりついた状態で2点の土師器蓋が出土している。おそらく現位置にあったものではなく石室内から動いた可能性が考えられるがこれらの遺物は出土状態より横穴墓に伴う遺物であると考えられる。

土師器蓋は（図4－3）器高3.4cm、口径11cmを計る完型土器ではあるが、土器の遺存状態がかなり悪いため観察は不可能であるがかなり薄くつくられたようである。

小　結

今回の調査は石室の規模・構造を確認するだけに留った。1・2号墓は花崗岩の岩盤に隣接して造り出し、1号墓は2号墓に比べて遺存状態が悪く、とくに羨道部分ではそれが著しかった。1号墓は玄室全体を家型に表現し天井から側壁の境界に溝を造り出し強い稜をもたし、天井部では約60°の勾配をもたし屋根形を意識している。2号墓は、ドーム状（かまぼこ型）に表現され奥壁部分で岩盤削り出し時の工具痕が確認されている。玄室の床面では、1・2号墓ともに2回にわたって貼土がされていた。

貼土部分の岩盤面は羨道部より荒く仕上げられており最初から作業工程の中で貼土をすることを計画していたとも考えられる。仮に岩盤面に直接棺を設置した場合、不安定になると思われそのため貼土の上に棺を設置することにより安定すると考えられる。また棺を安定させるだけでなく貼土の出土状態が床面全体にくらべ一段高くなっていることなどから棺台的な性格を含んでいた可能性も考えられる。排水溝は、1号墓羨道部床面より素掘りの溝が検出された。2号墓は1号墓で検出した顕著な溝はなく集水的な性格をもつように羨道部床面中央部を全体にくらべて低くなるように造り出している。

以上、簡単にまとめてみたが奈良県下において横穴墓が確認されているのは天理市龍王山古墳群、奈良市歌姫、高取町サラタニ横穴が上げられなかでも岩船横穴墓群と隣接するサラタニ横穴は立地条件、構造、規模など類似する点が多く、また、周辺地域については、小谷古墳、`沼山古墳、新沢千塚古墳群、天皇クラスの古墳など歴史的にも重要な地域でもあり、これらとの関連も今後検討する必要があると思われる。

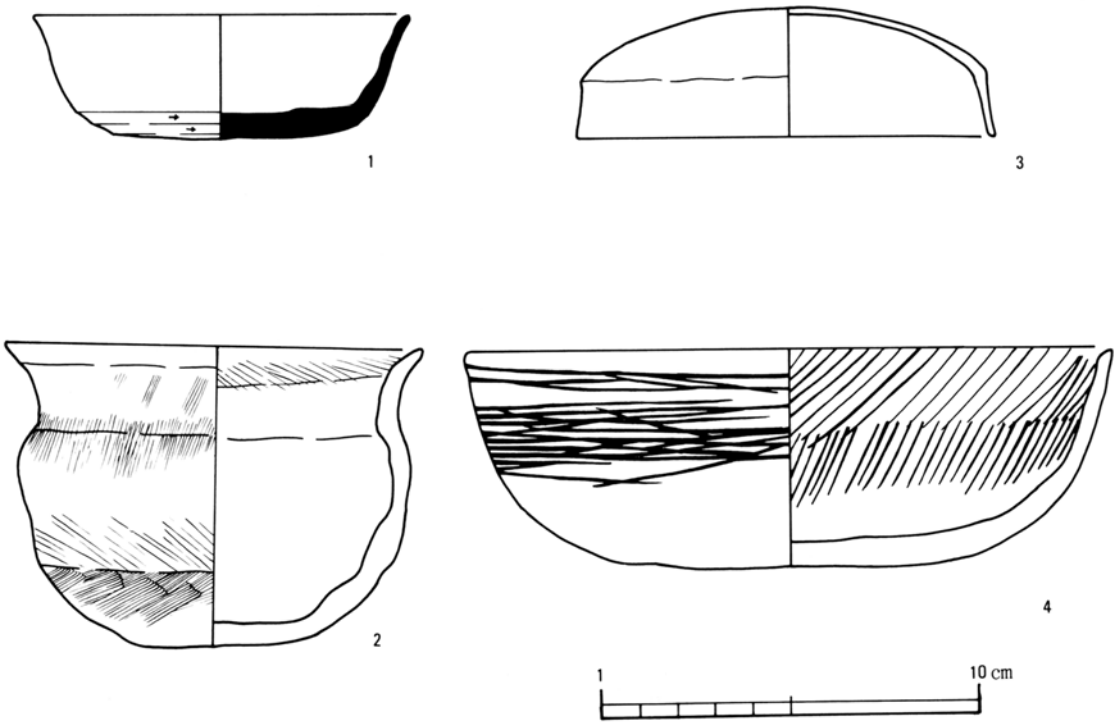


図4　1・2号墓　遺物実測図

Ⅱ．中曽司遺跡

はじめに

中曽司遺跡は、現在新興住宅化の波が急速に押し寄せ数枚の水田を残すのみである。本遺跡は弥生時代前期 ～ 後期まで断続する遺跡で過去数回の調査結果、報告より溝・土壙、柱穴などの遺構・遺物等が多く検出され多大な成果が得られている。周辺地域には、曽我川流域沿いに土橋遺跡、曲川遺跡、曽我遺跡などが隣接し、

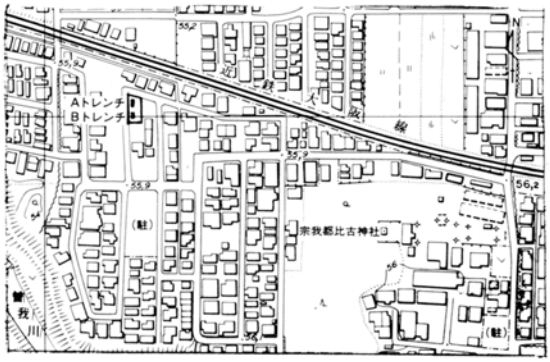


図５　調査地周辺図（１：2500）

さらに南下すると新沢一遺跡、さらに高地性集落として位置づけられている上ノ山遺跡、忌部山遺跡が立地している。

調査地区は住宅密集地域でもあることから調査区が狭小のため平面的な調査が困難であり今回は土層観察に主眼点をおき調査を実施した。その結果、中世素堀り溝、弥生の包含層が確認された。

写真10　調査風景（表土剝ぎ取り）

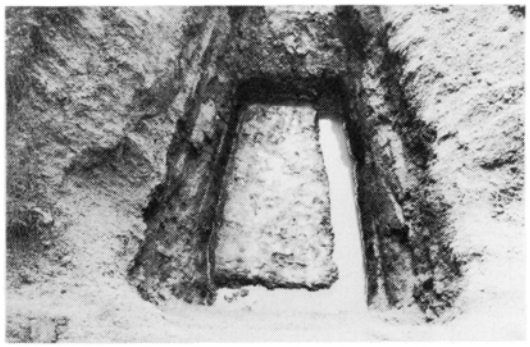


写真11　Ａトレンチ全景

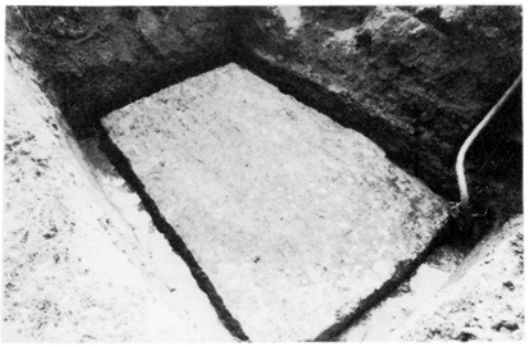


写真12　Ｂトレンチ全景

位置と環境

調査地は、橿原市中曽司町244-15番地にあたり住宅建設に先立つ事前調査で約266㎡を対象とし昭和59年９月６日より３日間実施した。先述した中曽司遺跡は、崎山卯左衛門氏[2]、島本一氏[3]、樋口清之氏[4]他などによって大正年間以来踏査、遺物紹介などが学界に報告されており昭和45年には奈良県立橿原考古学研究所が範囲確認調査の一環として試堀調査を実施している[5]。遺跡の範囲は、今までの調査、記録等をもとに現在のところ宗我坐宗我都比古神社を中心に東西200m、南北300mと推定されているが、いまだ、はっきりしないのが現状である。

以下、調査の概要を述べることとする。

調査の概要

写真13　現況風景

今回の調査は、調査地が狭少地であるため土層観察に主眼点をおき東西２ｍ、南北４ｍのトレンチを設定することにした。このトレンチは仮に北側トレンチをＡトレンチとし、南側トレンチをＢトレンチとする。(図５)計２ヶ所16㎡を対象として調査を進めた。A・Bトレンチの基本土層は、(図6)盛土・旧水田層・黄褐色粘土層、淡褐色粘土層、淡赤褐色砂質土層、濃青灰色粘土層に割けることができ、このうち黄褐色粘土層・淡褐色土層では東西方向に延びる中世素掘溝を検出している。とくに淡褐色粘土層で検出した溝は、同一方向に重なりあうもので埋土も黄褐色粘土層で検出した溝の埋土とは異なり明茶褐色砂質土をブロック状に含んでいた。遺物は、素掘溝内より土師皿細片が数点出土しただけで皆無に等しい。弥生土器包含層は、淡褐色粘土層より下位レベルで確認した。この土層は、鉄分を多く含む淡赤褐色砂質土で部分的に植物・砂の堆積がみられＢトレンチ南側で厚さ約40cm、Ａトレンチ北側で約25cmを計り全体に南から北に向って下がっていく傾向がみられる。

以上中世期は、素掘溝以外の遺構は検出されず、また弥生時代の遺構等もまったく検出されなかった。

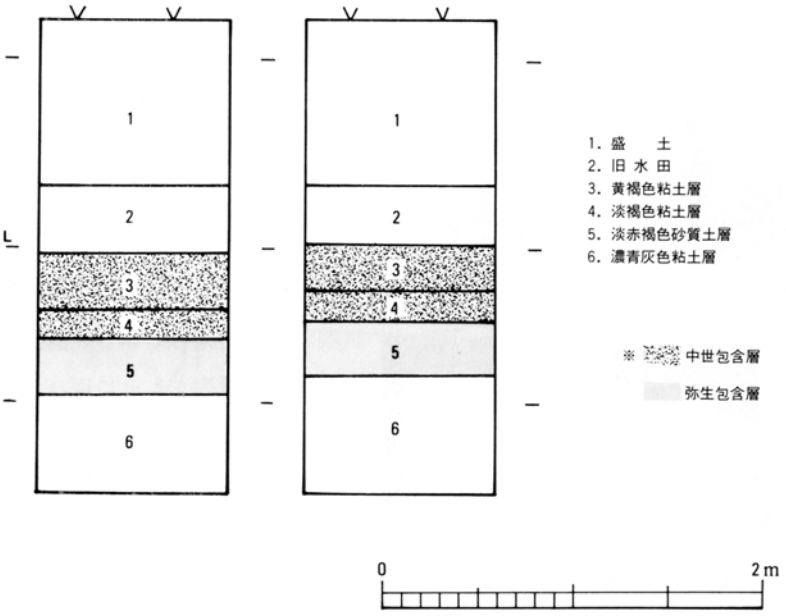


図６　Ａ・Ｂトレンチ柱状土層図（Ｌ＝54.800M）

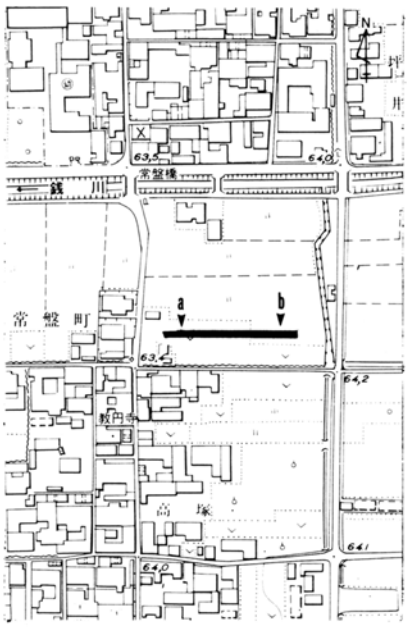


図７　調査地周辺図（１：2500）

Ⅲ．坪井遺跡（５次）

はじめに

坪井遺跡は、橿原市常盤町、桜井市大福に位置する遺跡で奈良盆地東南部を南東から南西に流れる寺川の右岸に立地する。これまで表採資料、水路工事にももなう採取資料などによって遺物の資料紹介、遺跡の規模、畿内における坪井遺跡の位置づけなど下村正信氏、綱干善教氏[6]、佐原塡氏[7]によって報告されている[8]。坪井遺跡の調査は、今回で５次を数え1981年にはじめて奈良県教育委員会が県立耳成高校建設のための事前調査として１次・２次調査[9]が実施され1982年には３次調査として橿原市教育委員会が都市計画道路建設の一環である農業用水路の整備に伴う事前調査を実施し。又、同年には４次調査として奈良県教育委員会が高校用地南端で擁壁工事に伴う事前調査が実施されている。これら数次の調査によって模大な数量の遺物・遺構等が検出され全国でも類例をみない遺物も出土している。これまでの調査結果により弥生時代前期（新段階）の壺棺墓、木棺墓、弥生時代中期（Ⅵ様式）の甕棺墓、後期の土壙・古墳時代前期の河跡が検出され坪井遺跡が縄文時代晩期～古墳時代前期（布留式）まで継続する集落址であることが確認されている。

位置と環境（図７）

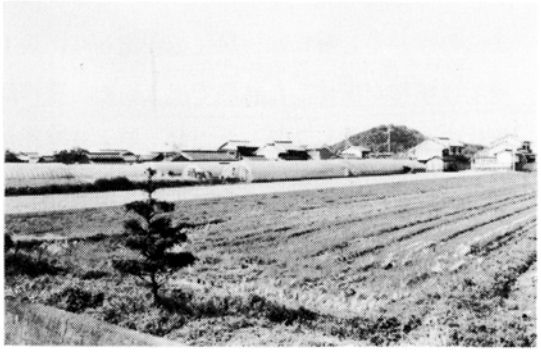


写真14　調査地区全景

坪井遺跡の範囲は、今までの調査だけでは断定することはむずかしいが、綱干善教氏によると大字坪井、高塚、大隅の東北一帯（約6000㎡）とされており、最近では亀田博氏が大福遺跡（桜井市）のＡ地区[10]について遺物・遺構の関係から坪井遺跡と連なるものと考えられている。

又、佐々木好直氏によると１次調査区の南半部を坪井遺跡の西北部と想定されている[11]。今までの調査地域は、高校建設、道路整備など北側に集中して多くの成果を上げたが、しかし南側地域については本格的な調査もされていない関係上はっきりしないのが現状である。今回の調査地区は、遺跡台帳に記載されているところの南に位置し、県立耳成高校より西南へ約300m坪井の集落の南側を流れる銭川左岸に位置する。（標高約62m）以上のことから今回の調査地区は、坪井遺跡の南

側の状況を確認することを目的として昭和59年12月17日に開始し、昭和60年１月31日に調査前の現状に復し、埋め戻し作業をして終了した。近年、この地域は近鉄耳成駅に近いこともあり住宅化、公共施設の建設・橿原市と桜井市を結ぶ都市計画道路（中和幹線）の整備地域であることから今後開発の波が進むことが予想される。

写真15　表土層剝ぎ取り風景

写真16　ＳＤ－０１掘り下げ

写真17　ＳＤ－０１完掘状態

調査の概要

○トレンチの設定

発掘調査は、対象面積が約900㎡であまり広い面積でないため排土のおき場などを考えた際南側は現在ビニールハウスが接近し、東側には用水路、西側に農業倉庫が建てられていることから北側に東西85ｍ、幅４ｍのトレンチを設定、実施した。

○遺構

今回の発掘調査により検出した遺構は、中世期の溝、３ヶ所にとどまった。このうち南側小口付近で南北方向に延びると思われる幅約3.5ｍ、深さ約40cmを計るＳＤ－01（図７－ａ部分・写真16）を検出した。図化はしなかったが、主として茶褐色砂質土が堆積し３層に分層できる。上層は約30cm・下層は約50cm・最下層は約20cmの厚さで各層には、炭化粒が混じり、最下層では植物が煤化した状態で出土した。遺物は細片のため図化しなかったが最下層より摩耗が激しい羽釜、土師皿が出土した。

東側小口で検出したＳＤ－０２の溝は（図７－ｂ部分）幅約２ｍ、深さ約80cmを計り埋土は４層に別けられる。6・濃灰褐色粘土（砂混）の下面から、7・暗青灰色粘土の上面にかけて（図８）流木が折り重った状態で出土しており、これらの木には加工した痕跡がなく出土状態から自然木と考えられる。（写真19）とくに最下位から出土した自然木には全面に煤が付着していたがどちらかと言えば炭化状態に近い。材質は不明である。流木を除去した際、無数の果実類とともに小片のため図化

しなかったが羽釜・土師皿・瓦器腕が少量出土している。

ＳＤ－０２の西側で検出した溝（ＳＤ－０３）は、幅約２ｍ、深さ約40cmを計る。埋土内から遺物が出土していないため時期は不明である。しかしＳＤ－０１・ＳＤ－０２の時期が瓦器腕から白石太一郎氏編年による第Ⅱ－２・３型式に比定でき実年代は12世紀後半～13世紀初ごろに伴行するため[12]ＳＤ－０１・ＳＤ－０２の土層関係より、ＳＤ－０３も同時期と思われる。

写真18
ＳＤ－０２ 掘り下げ

小 結

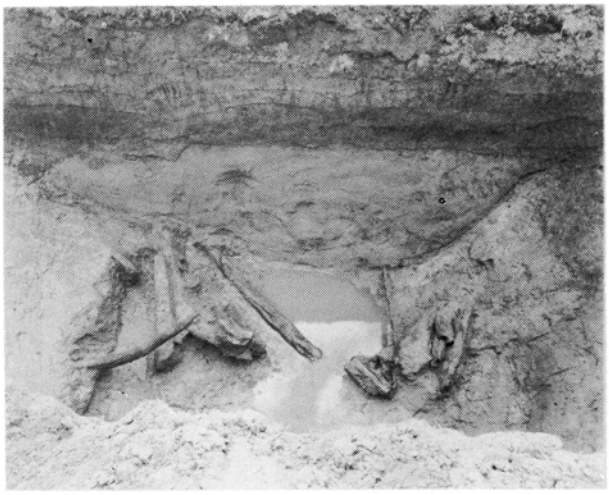


写真19 ＳＤ－０２ 流木出土状態

最後に今回の調査地区については先述もしたが、過去数次の調査がされきわめて重要な発見のいくつかがあった。しかし、集落範囲、立地環境を知る上でまだまだ手さぐりの状態である。そんな中で今回の調査地区は弥生時代の集落が南側までおよんでいるのかを目的に実施したが、その結果、中世期の溝しか確認されず弥生時代の遺構・遺物等は検出されなかった。調査終了段階で調査区全面にわたって中世遺構面をさらに掘り下げたが地山層を確認するのみであった。今回の調査で弥生時代の包含層が確認されなかったのは何を意味するのか近い将来周辺地域の調査をまつしかない。

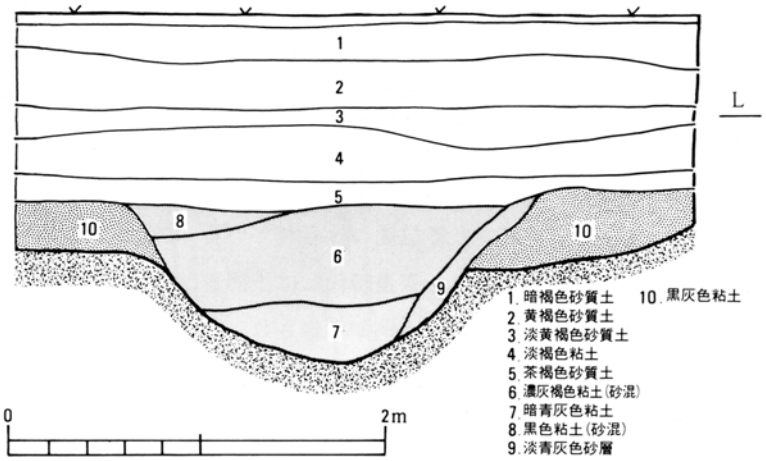


図８ ＳＤ－０２南壁断面図（１/20）Ｌ＝62.300M

Ⅳ．下明寺遺跡

はじめに

今回の調査は、農業用倉庫建設のための事前調査で対象面積376㎡、調査面積80.5㎡を昭和60年２月18日～３月３日まで調査を実施した。下明寺遺跡は、過去何回かの調査によって弥生時代後期～室町時代にかけての複合遺跡として紹介されている。なかでも昭和54年に奈良県立橿原考古学研究所が奈良県警宿舎の建設に先立つ事前調査で藤原京西一坊大路の北への延長線上に一致する道路遺構(大路)、それに直交する藤原京北京極（横大路）から北へ４条半にある道路遺構（小路）など藤原京条坊関係遺構が検出された。[13] しかし、南北に延びる道路遺構は京域内の大路にくらべて規模が小さくなり、また交差方法にも違いが認められるようである。同様な遺構は、院ノ上遺跡から藤原京西京極より西へ一坊半に位置する道路遺構も検出されている。その結果、藤原京域外にも京と同様の土地区画をもつ地割りが存在していたことが確認された。[14] しかし、どのような範囲で存在していたかは今後の調査によるところが大きいが中井一夫氏、松田真一氏により大まかな範囲の推定はされている。

また、道路遺構側溝内からは磨滅した円筒埴輪片が出土しているなどから古墳が付近に存在していた可能性がうかがわれる地域でもある。このことから今回の調査は、道路外地域における建築遺構・古墳等の有無を確認することに主眼をおき調査を実施した。

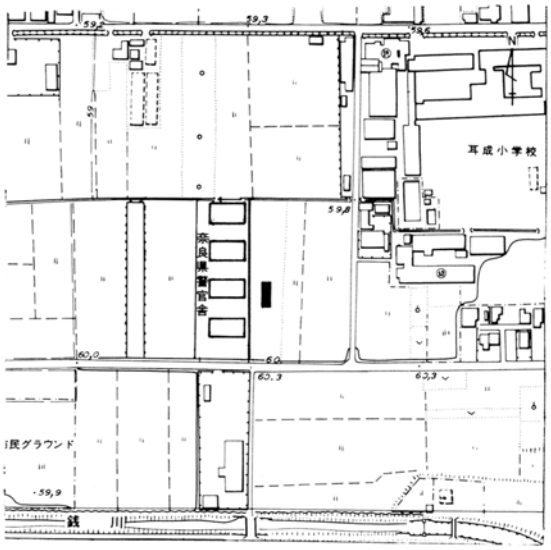


図９　調査地周辺図（１:2500）

位置と環境（図９）

今回の調査地は、昭和54年に橿原考古学研究所が奈良県警宿舎建設に先立つ事前調査によって藤原京条坊と関係する道路遺構が検出された東側（橿原市葛本町751－5）に位置する。先述した下明寺遺跡は、昭和12年に塩井孝順氏が国道24号線工事の際遺構・遺物が検出されたため調査を実施し報告されている。[15] 昭和50年には、奈良県立橿原考古学研究所が河川改修・中学校建設工事に先立つ事前調査が実施されその結果、幅約30ｍの自然流路北側に主な遺構が存在し弥生時代後期～室町時代まで続く遺跡として位置づけられている。また、一辺約31mの古墳時代後期の方墳が築造されていたことが確認され、奈良時代には上部を削平されていたと考えられている。[16] 奈良県警宿舎の調査中磨滅した埴輪片の出土例が報告され、藤原京域内の調査においても埴輪片が出土しているため造営以前には古墳が存在していたことが理解される。今回の調査地周辺についても墓山古墳・弁天塚古墳など具体的内容ははっきりしないが最近まで水田中に存在していたとされている。

調査の概要

○遺構

今回検出した遺構の概略は図10に示す通りである。以下、検出した遺構の概略を述べる。

ＳＫ－０１（図10・写真21・22）

ＳＫ－０１は、調査区北側端中央部において検出した。長径約1.50m・短径約1.10m、深さは検出面より約1.30mを計り、土壙内より８世紀後半と思われる土器が出土した。土壙内堆積土は４層に分けられ、埋土上層（淡青灰色粘土・淡黄灰色粘土）より土師器長胴甕が出土し、下層（緑灰色粘土）より土師器小型甕、須恵器大型甕の胴部、杯が出土した。

写真20　表土層剝ぎ取り風景

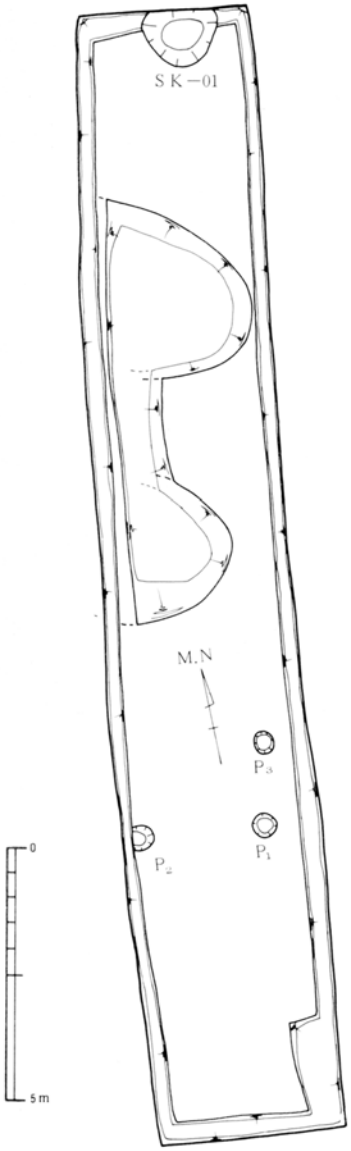


図10　検出遺構全体図

ピット（図10・写真21・22）

調査区南側よりにピット状遺構を検出した。　P_1は、径約40cm・深さ（検出面）約40cm、P_2は、径約40cm・深さ（検出面）約42cm、でかなりしっかりした状態である。P_3は、径約38cm、深さ（検出面）約10cmでP_1・P_2と比較した場合貧弱である。P_1・P_2は、出土状態から東西方向の広がりいかんでは柱穴になる可能性も考えられるため拡張する必要があったが、しかし調査地の制約上拡張するのが無理なため今回の調査では確認することはできなかった。

その他

調査区中央で水田耕作のさい掘られたと思われる土拡を３ヶ所検出した。この土拡は、切り合った状態で出土し、大きいもので径約３m、深さ水田床面より約2.5mを計り埋土内からは遺物は検出されていない。

○遺物

土師器（杯）図版５－1

器高3.23cm、口径12.1cmを計る。口縁部から胴部にかけて丁寧な横方向のヘラミガキが施されている。底部外面は、ヘラケズリがされ中央部にへそ状の凹部がみられる。内面は、ラセン文と２段の斜放射の暗文を施し底部外面には記号風の墨書がみられる。焼成も堅緻で精良な土器である。

土師器（甕）図版５－２

器高12.8cm、口径13.5cmを計る完成品である。口縁部内外面に横ナデが施されている。体部外面は、右下りの斜め方向にハケ（12本単位）を密に施し、底部は不定方向にハケ調整がされている。内面体部は板ナデの後、指ナデが施されている。胎土は1.0～1.5mmの砂粒を含んでおり、燃成は良好である。色調は燈灰色であるが内外面には部分的に媒が付着するため黒味を帯びる。

写真21　調査区全景(北から)

土師器（長胴甕）図版５－３

口縁部は、内外面に横ナデが施されている。端部は小さくつまみ上げており端面に凹状の端面をもつ。体部外面は頸部より⅔位まで縦方向のハケを施し、それより下は横方向の荒いハケが施されている。内面は横ナデが施され体部及び底部にはそれほど顕著ではないが指頭圧痕が認められる。

写真22　調査区全景（南から）

小 結

今回の調査区は昭和54年に検出された道路遺構の延長線上には直接該当しないが、先述もした道路外地域における遺構の有無の確認を主眼点として調査を実施した。その結果、顕著な建築遺構等は検出されなかったが、柱穴らしいピットが調査区南側で確認された。 しかし、これだけのピットだけでははっきりしないのが現状であるが、　東西方向のつながりいかんでは建物になる可能性も考えられるため今後の調査にまつほかない。また、昭和54年の調査では道路遺構側溝内より円筒埴輪片が出土しているため古墳が付近に立地していたと考えられているが、今回の調査では埴輪片などは検出されていない。以上、小面積でもあるため道路外地域における顕著な施設等は検出されなかったが、柱穴らしきピット、土壙などが検出されたため何んらかの施設がある可能性も考えられる。そのためにも近い将来周辺地域における調査に期待する。

参　考　文　献

① 伊藤　勇輔　「沼山古墳・益田池提発掘調査概報」
奈良県立橿原考古学研究所……1983年

② 崎山卯左衛門　「大和中曽司の石器時代遺跡」
考古学　3巻　6号……1932年

③ 島本　　一　「大和国高市郡中曽司附近の遺跡遺物出土報告」
考古学　1巻　4号……1930年

④ 樋口　清之　「新発見の画紋弥生式土器」
史前学雑誌　2巻　1号……1930年

⑤ 石野博信他　「橿原市中曽司遺跡予察調査の概要」
青陵　19巻……1971年

⑥ 下村　正信　「奈良県磯城郡耳成村坪井遺蹟遺物出土報告」
大和考古学　第2号……1932年

⑦ 網干　善教　「大和坪井の弥生文化の遺蹟に就いて」
古代文化　3巻　10号……1959年

⑧ 佐原　　塡　「弥生式時代」
伊丹市史　1巻……1971年

⑨ 佐々木　直好　「坪井遺跡第2次発掘調査概報」
奈良県立橿原考古学研究所……1983年

⑩ ⑦と同様

⑪ 亀田　　博　「大福遺跡」
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第36冊……1979年

⑫ 白石太一郎　「越智氏居館跡出土の瓦器　ー瓦器の終末年代に関連してー」
古代学研究85……1977年

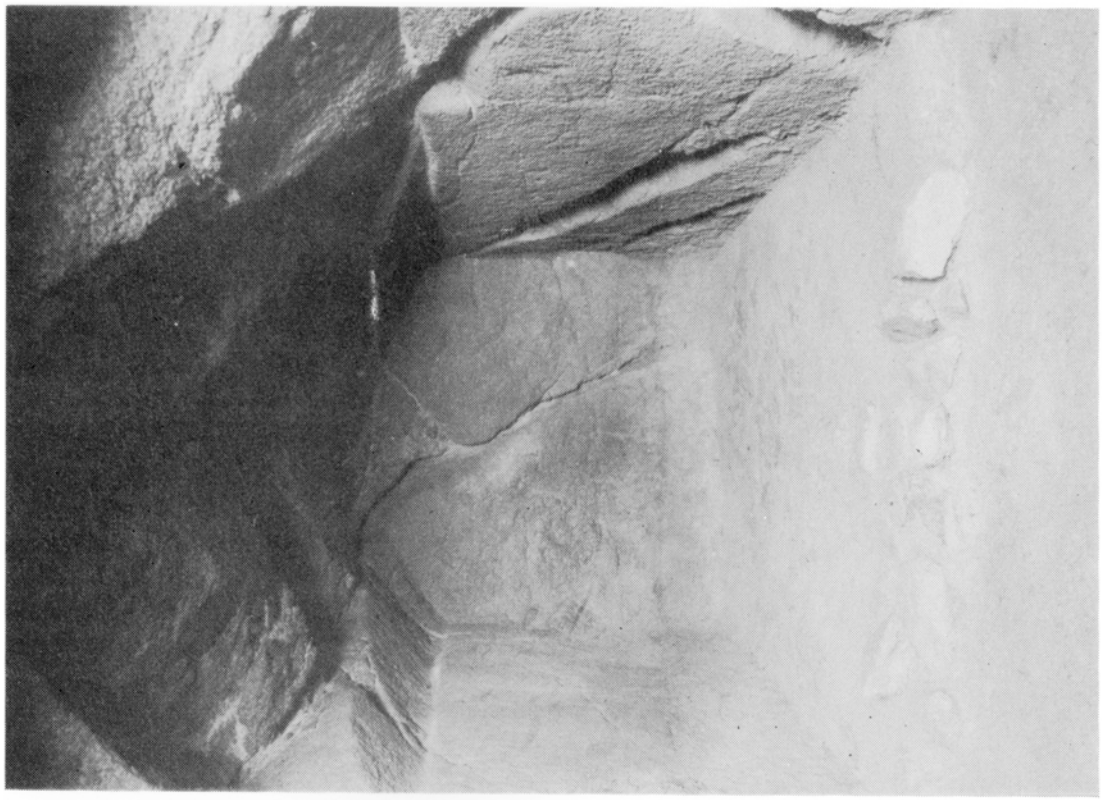
⑬ 中井　一夫　「藤原京条坊関連遺構の調査」
松田　真一　奈良県遺跡調査報告書……1981年

⑭ 楠元　哲夫　「院上遺跡」
奈良県文化財調査報告書　第40集……1983年

⑮ 塩井　孝順　「橿原市大字新賀　下明寺遺跡」
奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報　第9輯……1956年

⑯ 奈良県立橿原考古学研究所　「橿原市下明寺古墳　橿原市下明寺遺跡第3次調査」
(橿原考古学研究所年報)……1974年

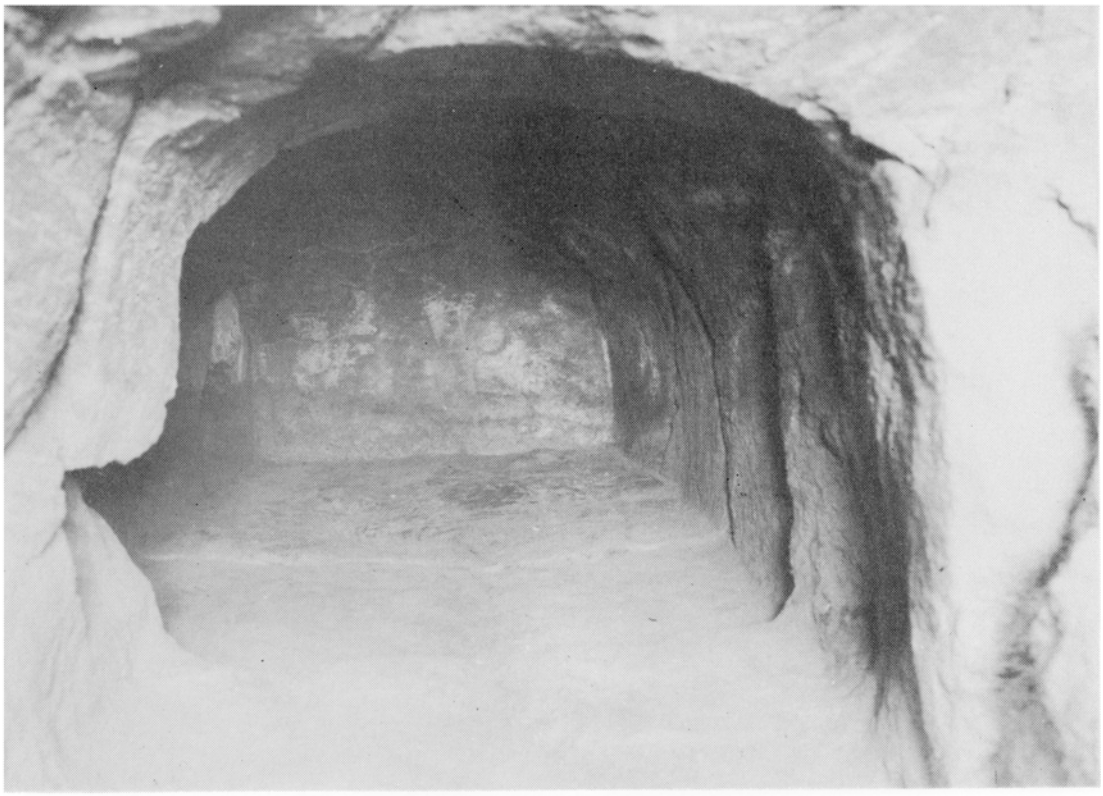
図版1　岩船横穴1号墓



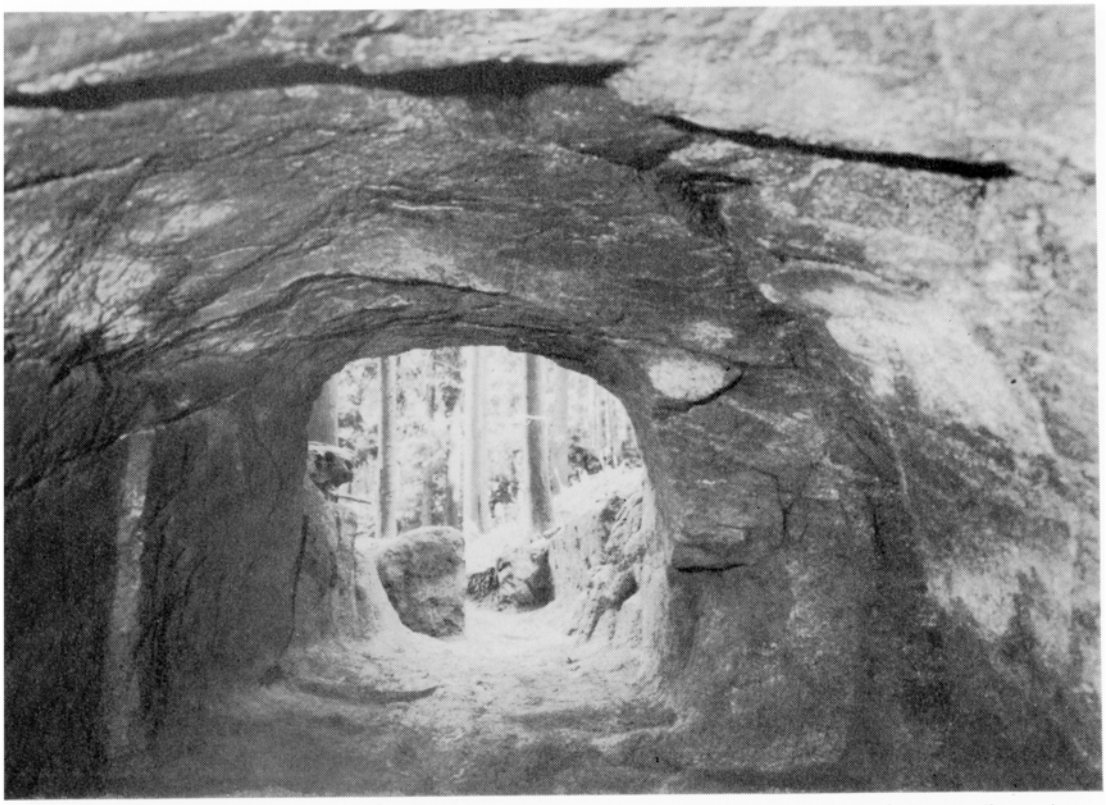
奥壁（南から）

羨道（北から）

図版2　岩船横穴2号墓



奥壁（南から）



玄室・羨道（北から）

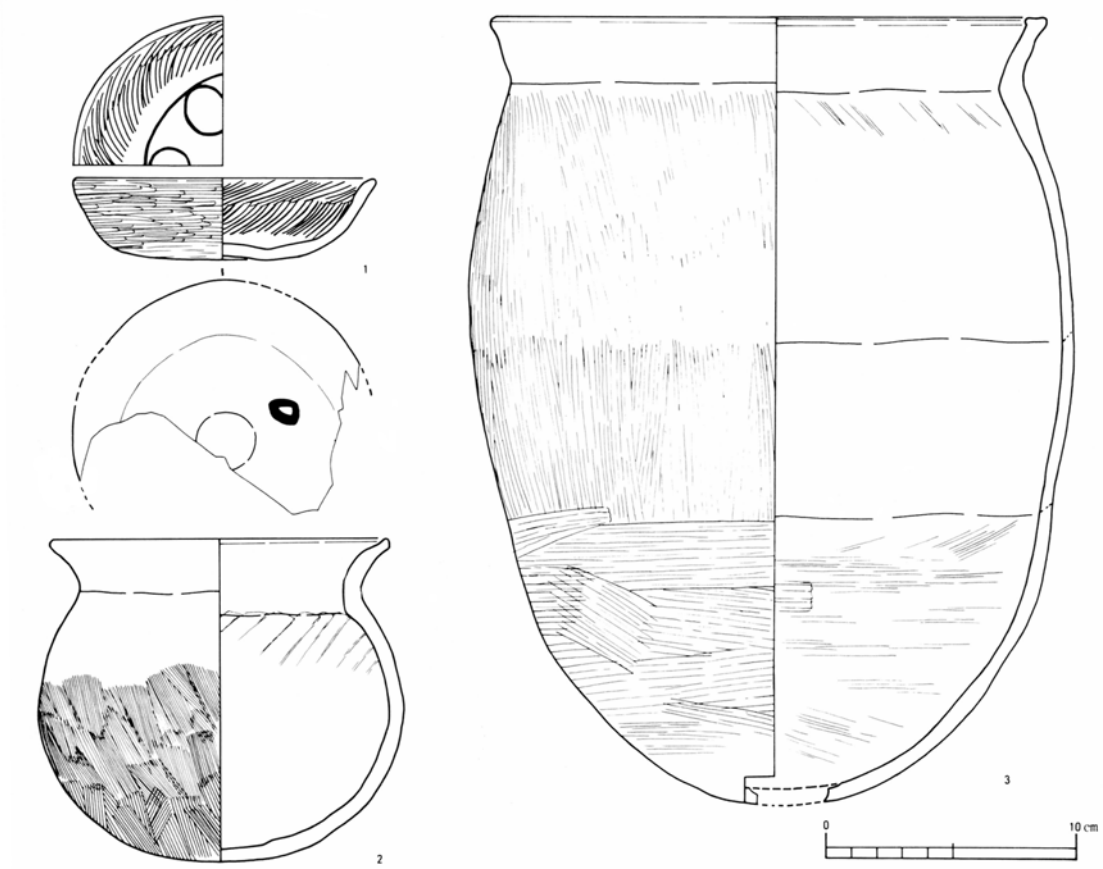
図版3　坪井遺跡（5次）

調査地全景（西から）

調査地全景（東から）

ＳＤ－０１　遺物出土状態

ＳＤ－０１完掘状態



ＳＥ－０１　遺物実測図（１/３）